

# 地域の文庫活動の歴史と方法の展開

## The History and Method Development of Activities for Children's Books in the Community.

(2016年3月31日受理)

坂田 季穂

Kiho Sakata

Key words : 文庫活動, 絵本の読み合い

### 抄 録

今回、地域の文庫活動の一例として長年にわたり活動を展開している岡山市の一文庫の活動に着目し、その文庫活動の歴史的展開と、どのように活動が行われているのか、その方法について明らかにしていった。家庭文庫から地域の文庫に発展していく中で、どのような経緯や方法で活動が行われていったのか、運営者の語りをもとに分析を行った。運営者の想いや、子どもと本をつなぐ関係性がみえてきたと共に、文庫の変遷についても興味深いつながりがみられた。

### I. 研究の背景と目的

本研究の目的は、地域の文庫活動の一例として岡山市A文庫の活動に着目し、その文庫活動の歴史的展開と、どのように活動が行われているのか、その方法について明らかにしていくところにある。

文庫活動の定義は様々あるが、高橋(2004)は、民間の個人やグループが自宅や地域の施設で、子どもを対象として図書の閲覧や貸し出し、お話会や読み聞かせを行う私設の図書館のことと定義している。文庫活動の目的は「子どもたちの心身両面の健全な発達をはかること」であり、読書だけでなく子どもたちの人間としての豊かな成長を願って活動している(日本図書館協会 1984)。文庫は主に2種類あり、個人が自宅を開放して行う「家庭文庫」と、グループが地域の施設を利用して行う「地域文庫」に分けられている。子どものための文庫活動の始まりは、1906年、児童文学者竹貫佳水が、東京都千駄谷の自宅に開設した竹貫少年図書館といわれている。その他にも、地域の子ども会、寺院、神社などでの文庫活動も行われたように推測されるが、記録はない。しかし、

現在のような形での家庭や地域で行われる文庫の形態は、戦後50年代になってからでてきて、60年代以降全国的に広がり、発展していったとされている。文庫の活動は、図書の貸出しをメインに、絵本の読み聞かせや紙芝居、おはなし、手づくり遊び、イベント等、文庫によって異なるが多岐に渡っている。

絵本の読み聞かせの方法については現在のところ共有されている定義はないが、例えば図書館情報学用語辞典(2013)によると、読み聞かせとは、読み手が聞き手に対して文を読んで聞かせる行為をいう。絵本の絵を見せながら読んで聞かせるのが一般的であるが、物語をただ読んで聞かせることもある。一方、絵本の読み合いとは、村中(2005)によれば、絵本を通してどちらか一方からもう一方への読み聞かせる行為よりも、互いにものがたり世界の不思議さに立ち合う対等な関係づくりであるとされている。決まったかたちや方法があるわけではないが、一方的に「聞かせる」のではなく、読み手と聞き手の心の通じ合い、楽しさを分かち合う相互関係を重視した方法である(生田他. 2013. 66頁)。つまり、絵本の読み合いの目的は、絵本を媒介として、人と人とが楽し

さやその時の感情を感じ合う共通体験の場であるといえる。様々な場で行われる文庫活動は、小道具を使うなどして、このように絵本を一緒に楽しむ読み合い活動も盛んになってきているといえる。

近年の絵本に関する研究は、従来の児童文学、児童文化、発達心理学、美術などの絵本研究の枠組みを超えた様々な分野から行われるようになり、「絵本学」という独自の学問領域の確立を目指して1997年に絵本学会も設立された。しかし、絵本の読み合いの方法に関する研究や文庫活動についての研究はまだ十分にされていない。そこで本研究では、地域の文庫活動の一例として岡山市A文庫の活動に着目し、その文庫活動の歴史的展開と、どのように活動が行われているのか、その方法について研究していくこととする。

## II. 研究方法

現在、岡山市で登録されている地域文庫は18団体あり、主に公民館を拠点として活動し、出前文庫として幼稚園や保育園、高齢者施設などに行って活動している団体もある。その中でも本研究は、比較的長期間にわたって活動を展開しているA文庫の活動形態に着目し、A文庫を始めたIさんにインタビュー調査を行った。インタビューでの語りを逐語化し、文庫活動の変遷や文庫活動が展開していった経緯や実際の方法について、分析し考察した。

## III. 語りの解釈と分析

### 1. 文庫活動の展開

#### (1) 地域の特徴

岡山市は比較的公民館での活動が盛んな地域であり、公民館で行う活動は誰もが参加できるよう開かれている。また、A文庫が活動している地域は、住宅街であるため地域住民が多い特徴がある。さらに古くからの街であり、住民の中でも長く住んでいる人が多く、現在の行政区分の中では比較的歴史的背景のある街である。また、この地域(学区)には公立の図書館がなく、図書館を利用する場合は市の中心部に行く必要がある地域である。

#### (2) 活動形態の変遷

以下はA文庫Iさんの語りの一部である。

…小学校の教員をやっているときに、そのときに、子どもに本を読んでやったの。そしたら、私がねえ、えー、54歳で、辞めたの。そしたら、家に、あの本を借、あの読んでくれて子どもが来て、あの、4年生の子どもを教えて、辞めました。その時に、まあ家庭の事情で、まあ早く辞めたの。そしたら、その4年生の子どもが、5年生になる春休み、①全員で、先生本もって読んでくれっ、と言うて、でそれが、ここの文庫ができる、家庭文庫、うちで、子どもたちに、うちにある本を貸して、読んで聞かせた。それが、もとです。で、あの、うちにある本を、10年間ぐらい、その子どもたちが、4年生5年生ですから、5年6年でしょ、中学3年、で、高等学校、10年ぐらいの間、もうほとんどその子どもたちが来たの。そして、大学になると、あの、日本中へ子どもが散って行って、夏休みになったら来てた。そしたら②その子どもの、あの弟とか妹とか、その親類、みんなが知ってる人が、どんどんどんどん来て、そして、その、うちでは、できなくなって、10年ぐらいやってたけど、それで、B公民館で、A図書館というのを始めた。ところが、A図書館は、あの、C公民館の分しか、貸出しができない。それから、貸してやっても、その子が読んだか読まないか、それから、この本について、関連の本があるかないか、それが、図書館の、あの岡山市からまわってくる本だから、自分たちのを持っていない。それで、非常に不便。思いながら、A文庫を、やった。B公民館で。そしたら、その、もうそこがどんどんどん、あの子どもたちが来るようになって、そして、あのA図書館に、こうまあ分岐ができて、そしてこの、③小学校の校長が、私の教え子であったときに、この場所(C小学校)を借りて、始まった。

…中略…

ここにA図書館が出来たのは、Yさんがもの凄く力を貸してくれた。その時の校長が私の教え子だった。それで出来たんですよ。私が大病して、文庫はもう出来ないなあと諦めていた。そしたら、C小学校の校長が来てくれて、それでここの二階へこういう場所を貸し出してくれて、ここでやりなさいと。あの時にもう諦めていた。

まさかA図書館がこういう風になろうとは思わなかった。A文庫だと。だからA図書館という地域の子どものための図書館で、まずは、D文庫、家庭文庫。家庭文庫は家庭の事情で家族に病人が出たら出来ない。うちに病人が出て、入院の看病に行かないと。それでもう諦めて。そしたら、B公民館でやりましょうというのが出来た。その時には20人ぐらいの人が集まって。集めたのはYさん。私はB公民館の館長に。私はこうこうなったんで、やらしてくれと頼みに。そして、B公民館でやっていた。そしたら、また私が。もう今度こそ駄目だと思った時に、教え子がここの校長だって、Yさんが議員だった。それでここで、ここの図書館（A図書館）が出来た時にそれに合わせてこういう図書館を作ってちゃんと出来た。ありがたい。だから私が病気したり、家庭の事情で辞めようと思う時に、一人じゃなかった。④仲間がおって、どんどんどんどん。…

(2016年2月17日 Iさんの語り)

児童図書館研究会の調査によれば、全国で1969年に160文庫であったものが、1970年には265文庫、1974年には2064文庫、1981年には4406文庫と、急増している。下線部①～③の語りからも分かるように、岡山市内のA文庫は家庭文庫から始まり、公民館を拠点とした地域文庫を経て、現在A図書館として小学校の中に設置されている。地域文庫として活動し始めたのが1989年であり、まさに文庫活動が全国的に大きな高まりを見せた時代のことである。

当時小学校の教員をしていたIさんは、子どもたちに絵本や児童書などをよく読んで聞かせていたという。そんな子どもたちとの信頼関係の中、退職後も子どもたちの要望に応えるかたちで家庭文庫としてD文庫の活動が始まったのである。その後、地域の住民が多く集まるようになったD文庫は、家庭から公民館へ移行し、A文庫として公民館を拠点に活動を行った。その後、C小学校の校長先生がIさんの教え子だったというつながりや、地域住民であったYさんの協力のもと、C小学校の体育館の2階のスペースでA図書館としてA文庫の活動が展開され、公民館での活動と同時に現在も続いている。Iさんは、下線部④のように一人ではできなかったと語っている。このように、もともとの地域性の特徴を活かし、

Iさんの人脈から、最初は小さかった家庭文庫がどんどん発展し、子どもたちをはじめ多くの地域の人々が利用できるA文庫に変遷していったのである。

## 2. 各形態の活動の方法

以下もA文庫Iさんの語りの一部の続きである。

家庭文庫は木曜日と土曜日にやっていたかな。一番は私が忙しくて土曜日だけの時、二週間の入れ替え。4年生になって、5年6年という子どもたちが使っていた。ずっと来る。⑤庭で遊ぶだけの。それが近所の子を連れてくる。そうしたら中ではお父さんが連れて来て、ちょっと仕事に行ってきますからと頼むらしい。うちの庭は非常に広い。池があるし、色々ある。そこで遊ぶ。庭の池に落ちた子どももありました。でも私は家庭文庫さえ出来ればとつてもいいですよ。だけどね長くは出来ない。

…中略…

A文庫はねえ、あの元々B公民館、B公民館で、あの拠点にして、始まったの。それでね、B公民館でやっていたんですけど、ところがA文庫の、これがまあ発展的、あれで。で、A図書館はまだ、そんなに長くない。あのB公民館から、C小学校、枝葉が広がったわけ。だから、B公民館ではもう非常に早くから、A図書館が、A文庫が活動したの。で、ここはA図書館です。ですから、少し、A文庫の場合は、あの⑥図書館機能をもっていない。公民館の本を借りて、公民館の職員が帰ってきたら片づける。だから、誰が何を借りたかという個人のカードができない。そしたら、⑦この場合は（カードがある場合）一人の子が、どんな本を借りたか、ということが分かるわけ。そうするとね、みて、あなたはこういう本を借りてるねと、そしたら、ここ（A図書館）の本はA図書館の本です。そしたら、この本の中に、あの、借りた本があったら、この本の親類は、あっこにあるから借りてお帰り、ということが言えるわけ。だから、あの、もう本の数は少ないんですけど、非常に選んである。それで、まあ、私がよく一番知っているけれど、あの、A図書館にA文庫にある本で、A図書館に並べてある本は、知っているわけ。あっこに行って借りなさい。あっこにあるよ、ということが言えるわけ。そしたらね、非常に、あの、読書というものが、ただ一冊で、一つだけというのも、

いいけれど、一冊読んで、それからずーっと続く、あの、関連の本を読む、それ非常にいいです。それができる。そして、それができると、本が並んでいます。だから、あつこのへんでは小さい、あの、赤ちゃんのものもある。あつこのほうは、大人が読んでもいいような本がある、という風に、数は少ないけれど、非常に、あの千選されている。あの、本の、子どもの本に詳しい方が来たら、ああ、ここの文庫は、非常に優れた本があるなあということが分かれると思う。そこらへんのある本、そのへんの本は、私が一冊ずつ読んで、ああこれがいいと思って初め買ったもの。とてもいい。

…中略…

家でやって、家庭文庫をしてた、それからB公民館に移って、それから、それからここ(A図書館)へ、枝が広がった。ずーっと地域に、あの子どものための、読み聞かせ、貸出し、ここが一番いいですよ。だって、⑧貸出しができる。それから、借りた本について、あの、あんたが借りた本はね、ここにあって、そこのこれを読んだら、大きくなったらこっちを読んでごらん、ということが、言える。それが、あの、それが言えるということが、非常にいい。で、そうやって、本を借りて読んだ子が、だいぶおりますよ。今でもおる。で、まあそれができるといのは、あの、本について、知らなきゃできない。で、ここの(スタッフ)は、学校の先生が多いです。半分以上。あの、小学校の先生、や、あの高等学校の先生だった人が、大学の先生もおる。そういうことで、みんな、本に、よく知ってます。だから、あの、まあ本当の図書館員ではないけれど、ここの本については、みんなよく知っている。そういうことが、あります。

…中略…

ここが一番読み聞かせも出来る普通の図書館になった。文庫の場合は、読み聞かせは出来るけど公民館では自分たちが選んだ本を貸すことが出来ない。自分で選べない本というのは、これはなあというのがあります。だから、やっぱり⑨ここは私たちが選んだ本で、自分で選んで買った本で。だから文句はない。ああこんな本がなあという本はありません。全部自信があります。だから、マンガもあります。マンガだっていいマンガはいっぱいあります。それから色んなこういう本を読ませたいという本は。だから科学は弱い。教え子が折り紙をつけてく

れる科学については、教え子や科学に強い人がスタッフにおります。男の人。その人が選ぶ。あつこのほうですよ。文学について、私がかかなり偏っていますけど、好きな本が。だから私がIカラーは愛していますけど。特にその辺を。自分が読んでこれはいいと思った本を。あと作家について文学全集を読んで、作家について好き嫌いをしない。好きな作家の絵本を買って。だからどうなってるわけではありません。普通の公共図書館ならあらゆるものがあるけれどそうではない。ここはどちらかというと、Iカラーが強い。そうなのもいいです。

私としては、もうちょっと詩の本、詩集とかいうのがもっとあっても。かなり人から貰いましたけれど。貰った本をまず読んで、これは駄目だという本はもう全部置いていない。置いてある本については、私が生きている間は、責任を持っている。

…中略…

一人で、一人の人間が全部出来ない。特に読書についてはね。私は非常に偏っている。偏った読書をしていますから。でも、ここにある本については偏ってないですよ。こっちは全部理科系の本ですよ。ここらへん、どっちかというと文化系が多い。私が選んだ本は自信があります。だからロングセラーになった。また子どもに読ませたい本から始まる。大人が読んでも本格的なものがたくさん。それでなきゃね、子ども騙しの本ではいけない。

…中略…

登録しているスタッフは20人以上はいます。それが当たり入ったりしながら、「もう2年ぐらい姑さんがこうだったから来れなかったけど」と言って来てくれる人が。そういう風な人がいて、今日は少ないですけど、だいたい10人ぐらいは、おばさんがいる。そうすると子どもは来て何もわからないで、そして今日はいないけど、おばさんが一人座っている。そこに行って話をして帰るという子もいます。⑩A図書館へ行く」と話し相手のおばさんがいるというので、子どもが来る。C小学校の場合は、あれだけの子どもがいて司書が一人。そうすると司書の人はまだまだ。ここの所は、おばさんたちが10人ぐらいいつもゴロゴロしてる。

そして話が出来る。そこがいつもの先生の、その人はいつも子どもの相手をして話をしてくれる。貸出するわけでもなんでもない。そこに座って。今日は来てません

が。そういう人がいて話し相手になる。

そして、A図書館の場合は皆さん無料です。お金を全然。誰にも払っていません。私もお金はない。それぞれ地域の年寄。若い人というより、おばさんと老人集団。地域の奉仕団体。ここに来たらこっちが命が伸びる。皆それぞれ学校の先生をもう辞めて年金をもらっている人だから、お金を稼ごうと思わん人。そういう人たちが。ここにいる人、皆先生です。

(2016年2月17日 Iさんの語り)

家庭文庫としてのD文庫から公民館を拠点としてのA文庫に移行し、小学校でA図書館としても活動するようになったA文庫であるが、それぞれどのような方法で文庫活動が行われ、現在に至っているのであろうか。まずD文庫では、下線部⑤からも分かるように、週に2日、Iさんが持っていた絵本や児童書を来る子どもに読んで聞かせたという。また、Iさんの自宅で活動していたため、庭や家の敷地内で遊ぶ子どもが多く、時には親が子どもを預けて出かけるなど、家庭的な雰囲気の中で地域の人々がつながって活動を行っていた。その後家庭の事情と、来る人数のニーズに対応して家庭から公民館に拠点を移し、D文庫からA文庫に名称を改名したA文庫であるが、公民館ではどのような活動の方法を展開していたのであろうか。家庭文庫の時より、文庫の利用者は増え、広いスペースも使えるため、絵本の読み合いやおはなし会、人形劇や行事のおまつりなど、様々なイベントが活発に行われるようになった。まさに、公民館に文庫が移ったことで、より多くの人々、また地域の中へ絵本が広がる大きなきっかけとなったといえるだろう。

しかし公民館では、下線部⑥のように、一人の子どもがどの本を借りたかという個人のカードがなく、公民館にある本での貸し出しを行っていたようである。それが小学校に移りA図書館として活動する際には、下線部⑦～⑨の語りからも分かるように、文庫の運営者が自ら選んで置いている本の貸し出しを行い、子どもの読書の道筋のきっかけをつくることができるようになった。Iさんが、子ども一人ひとりに合わせて本を薦められることが非常に良いと繰り返し語っていることから、子どもと本をつなげられることのIさんの強い想いが感じられる。

また、文庫のスタッフも、文庫が発展していくとともに変化をみせていっている。家庭文庫の時には、ほぼIさんだけであったが、公民館で地域文庫を展開することにより、スタッフも増えていった。子どもが好き、絵本が好きという共通点で集まったメンバーが、それぞれの特徴を生かすことで、バラエティーに富んだ活動を展開できるようになったという。絵本の読み聞かせ、工作、縫い物、折り紙、ストーリーテリング、歌、人形劇等、様々な活動が公民館で行われたり、幼稚園へ出前文庫として出かけたりし、多くの子どもたちや地域の人々が楽しみにしていたのである。

現在、A図書館として小学校を拠点として活動しているA文庫であるが、スタッフが交替で保育所・幼稚園・小学校・図書館・公民館・高齢者施設などに出前文庫へ行き、絵本の読み合い活動を行っている。語りからも分かるように、本が好きで、本に詳しい人が多く、それぞれの得意分野を生かしながら子どもと本をつなげるきっかけとなっているようである。また、本は借りないが文庫にいるスタッフと話をしに来る子どももいるようで、現代社会においても必要不可欠な子どもたちの居場所にもなっているのではないだろうか。

#### IV. ま と め

今回、地域の文庫活動の一例として岡山市A文庫の活動に着目し、その文庫活動の歴史的展開と、どのように活動が行われているのか、その方法について検討していった。地域の特性を踏まえながら、家庭文庫から地域の文庫へと大きな広がりを展開していったA文庫は、まさに人と人とのつながりの中、様々な人の力によって現在に至ったのである。それぞれの場所で行われた文庫活動の方法についてはそれぞれの良さ、また相違点があるものの、一貫してIさんの文庫に対する熱い想いや願いが垣間見えた。語りにあったように、子ども一人ひとりに合った本を選んで薦めていることも分かった。しかし、特にスタッフなどの活動者がどのような本を具体的に子どもに薦めているのかまだ不明な点があった。子どもに合わせて、どのような子どもに、どのような本を薦めているのか、道筋を追うのは大変興味深い点である。そのような視点からも検討できるよう、今後の課題としたい。

## 参 考 文 献

- 生田美秋・石井光恵、藤本朝巳 2013 『ベーシック絵本入門』ミネルヴァ書房
- 石井桃子 1965 『子どもの図書館』岩波書店
- 村中李衣 2005 『絵本のよみあいからみえてくるもの』ぶどう社
- 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 2013 『図書館情報学用語辞典 第4版』丸善出版
- 大阪国際児童文学館 1993 『日本児童文学大辞典』大日本図書
- プーさん文庫 1999 『絵本のあるくらし』吉備人出版
- 高橋樹一郎 2004 『新・子どもの本と読書の辞典』ポプラ社
- 鳥越信 2002 『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ 戦後絵本の歩みと展望』ミネルヴァ書房
- 全国子ども文庫調査実行委員会 1984 『子どもの豊かさを求めて—全国子ども文庫調査報告書』日本図書館協会